

震災映像記録7件に

前田道路と東亜建設認定

3・11伝承ロード推進機構（今村文彦代表理事）は13日、仙台市内で東日本大震災の記憶・記録を映像で残す映像アーカイブ事業の第4回試写会と認定証交付式を開いた。写真・登録第6号の前田道路と第7号の東亜建設工業を認定するとともに、同機構のホームページなどで映像を公開した。

震災直後の建設業界の働きを可視化し、「レガシー」として後世に残す取り組みとなる。企業などからの申請を受けて候補作を認定する。提供された資料をもとに、共同でシナリオなどを作成し、映像を制作する。今村代表理事ら委員の認定を受けることになる。

今村代表理事は、大西國雄前田道路常務執行役員と竹市卓矢東亜建設工業執行役員東北支店長に認定証を手渡した。後、「震災当時の記憶が薄れる中、後世や他地域に伝えるための重要な活動だ。映像を見ることで、各企業が復旧に尽くしてくれたことを思い起こしてほしい」と語った。



前田道路の『仙台空港を啓開せよ!』は、津波にのみ込まれた仙台空港滑走路の早期機能回復に向けた啓開作業を記録した。米軍によるトモダチ作戦実施前に、10人体制でスタートし、最盛期には200人が従事した。侵入者を防ぐため数千本の木柵を空港周囲に打ち込み、民間航空機の早期離発着の再開を実現した。当時、東北支店長だった大西氏は「家族の安否も確認できないまま、寝る間を惜しみ過酷な啓開作業に当たったことを思い出した。人の心に訴え掛けるドラマチックな映像に仕上げていただいた」と謝意を示した。

東亜建設工業の『気仙大橋を通せ!』は、津波で上部工が流出した岩手県陸前高田市にある国道45号気仙大橋の仮橋開通までの61日間をまとめた。作業所長を務めた木村和弘氏のインタビューを中心に、海上架設などの工期短縮の取り組みや、開通式典当日に津波警報を受けた緊急開放と避難などを振り返る内容となっている。竹市氏は「当時の関係者をはじめ、全社員が映像化を喜んでいて。社会に貢献している企業の姿を見てもらうことで、担い手確保の一助になってほしい」と語った。

